

Institute for Language Education  
Aichi University, Nagoya  
**Goken News**  
No. 12 Dec 2004



アントルヴォー：  
中世の雰囲気を残す南仏の小村。背後の岩山の上に17世紀から18世紀にかけて建設された城塞がある。1860年までフランスの国境であった。

CONTENTS

- |  |    |   |    |
|--|----|---|----|
| ・ 中国のアニメ・漫画映画<br>(藤森 猛) .....                    | 2  | ・ THREE DAYS IN MADRID<br>(John Hamilton) ..... | 15 |
| ・ 中国留学体験談<br>法学部2部 原田大輔君へのインタビュー<br>(鄭 高咏) ..... | 4  | 海外最新事情 .....                                    | 19 |
| ・ 世界で一番好きな歌手<br>(山本 大造) .....                    | 6  | ・ イギリス  |    |
| ・ 悲しみは夏雲の下に サイパン島訪問記<br>(河原誠三郎) .....            | 8  | ・ アメリカ  |    |
| ・ メキシコ・チワワ鉄道に乗って<br>(丸谷雄一郎) .....                | 12 | ・ ドイツ   |    |
| ・ スプーナーとスプーナリズム<br>(安藤 聡) .....                  | 13 | ・ フランス  |    |
|  |    | ・ 中国  |    |
|  |    | ・ 韓国  |    |

## 中国のアニメ・漫画映画

現代中国学部  
藤森 猛

### 中国アニメ映画のジャンル

中国映画には一般に“故事片”（劇映画），“紀錄片”（ドキュメンタリー・記録映画），“新聞片”（ニュース映画），“科教片”（科学教育映画）があり，さらに“美術片”（アニメーション・漫画映画）を加えると5ジャンルに分類される。

またどのような素材を使用してアニメーション原画を作成するかによって，中国アニメ映画を“动画片”（セルアニメ），“木偶片”（人形アニメ），“剪纸片”（切絵アニメ），“折紙片”（折紙アニメ）に分類し，中国オリジナルの“水墨片”（水墨アニメ）や最近の“電腦动画片”（CGアニメ）を加えると6ジャンルに分類される。

### 伝統的アニメの継承

中国最初のアニメ映画は，1926年の『大鬧画室』（アトリエは大騒ぎ）であり，万籟鳴・万古蟾・万超塵・万滌寰の4兄弟が，中国アニメの創始期から現代に至る発展期までを常に先導してきた。彼らの目指したアニメ映画は，アメリカのフライシャー兄弟やディズニーが描いたボパイやミッキーマウスであり，世界初の長編カラーアニメである38年『白雪公主』（白雪姫）であった。またアニメ制作は，卓越したアニメーターによる緻密な手作業による芸術作品（美術作品）であったため，中国語では（広義の）アニメ映画を“美術片”と呼んだ。また中国語では，英語の“cartoon”を音訳した“卡通kǎtōng片”，“animation”を意識し

た“动画片”がそれぞれ（広義の）アニメ映画，狭義のアニメ映画（セルアニメ）の意味としても用いられる。

まず人形アニメでは，47年，方明（日本の本名：持永只仁）が撮影した『皇帝夢』（皇帝の夢）に始まり，53年に最初のカラーアニメ映画『小小英雄』（小さな英雄）が制作された。58年には“児童片”（子供向け映画）の代名詞ともなった『三毛流浪記』が人形アニメ作品となり，63年には最初の長編人形アニメ『孔雀公主』（孔雀姫）が生まれた。改革開放後の79年には『阿凡提』が制作され，81年～88年には13作の連続アニメへと生まれ変わり，中国における人形アニメの代表作となった。80年代から90年代にかけて生まれた『大盜賊』，『西遊記』，『鏡花縁』，『象鼻子』，『隱身探長』などのシリーズ作となった人形アニメ映画はいずれも中国固有の物語を素材にしている。また背景や人物描写は簡素であるのと同時にセリフが少なく，一方で民族的な音楽が全編を流れ，伝統的な人形アニメの形式を継承している。

また折紙で作った動物などのキャラクターを画面上に構成して制作する折紙アニメは，60年『聰明的鴨子』（かしこいアヒル）に始まった。80年代以降では，80年『小鴨呷呷』（アヒルがあがあ），88年『藍骨』（青い骨）など作品数は最も少ないものの，幼児向けアニメとして作品が定着した。作品としては動物の親子をテーマとする物語であり，幼児・児童による合唱曲が用いられる。

一方，水墨アニメ映画は，中国で最も芸術性やオリジナル性が高いと言われる。最初の作品は60年の『小蝌蚪找媽媽』（おかあさんを探すオタマジャクシ）であり，“水墨动画片”（水墨セルアニメ）として生まれた。63年『牧笛』は齊白石の水墨画が背景に用いられ，水墨アニメが国際的な評価を得た。80年以降は『鹿鈴』，『鸚鵡相争』，『山水情』，『蘭花花』，『雁陣』，『雪鹿』などの名作を生んでいる。水墨アニメも中国の伝統的な物語を素材とし，動物や子供の心のふれあいをテーマに作品が構成され，人物の輪郭が背景の水墨画である風景画の中に溶け込んでいる。登場人物のセリ

フはほとんどみられないが、民族楽器を多用した伝統音楽が全編に流れている。

### 新たなアニメの模索

アニメジャンルのうち、切絵アニメ（剪纸アニメ）では、1958年に『猪八戒喫西瓜』（猪八戒スイカを食う）が生まれ、万4兄弟の一人である万古蟾によって、『漁童』、『济公鬧蟋蟀』、『人参娃娃』、『金色的海螺』などの作品が次々と制作された。また80年代前半までに『猿子擲月』、『淘气的金絲猴』、『火童』、『水鹿』などの作品が作られ、いずれも人形アニメや水墨アニメと共通する中国固有の伝統アニメの性格をもっていた。

ところが80年代半ばから90年代になると、家電製品の中でテレビの普及が急速に進む中で、『鉄臂阿童木』（鉄腕アトム）、『一休』（一休さん）、『機器猫』（ドラえもん）、『奥特曼』（ウルトラマン）などのテレビドラマ・コミックが日本から流入し、中国において社会現象を引き起こすようになった。切絵アニメにおいては、86年から13作の連続アニメ『葫蘆兄弟』（ひょうたん兄弟）が制作され、興行的にも成功を収め、90年代の『葫蘆小金剛』（ひょうたん金剛）などのヒットに引き継がれた。これらの作品は、基本的なストーリー展開が中国固有の物語ではあるものの、日本の「アトム」・「ヤッターマン」・「ウルトラマン」シリーズや少女漫画、あるいはジャッキーチェンに代表される香港カンフー映画などの影響を強く受けている。キャラクターの動作や物語のテンポが非常に速くなり、ストーリーが神話的なものから現代的かつコミカルなものへと変化している。

またアニメ映画の主流であるセルアニメについては、文革以後、79年『哪吒鬧海』（ナージャ海を騒がす）で復活を遂げた。また86年までは“上海美術電影製片廠”（上海アニメ映画製作所）が独占的にアニメ映画を制作してきたが、87年には長春映画制作所によって『鷹』が作られた。93年以後はアニメ映画も正式に市場で売買されるようになり、競争化が進んでいる。セルアニメ作品としては、日本アニメの影響を最も強く受け、80年

代半ばから現代ものセルアニメが多く制作されている。その中でも、84年から制作された連続アニメ『黒猫警長』シリーズは、90年代を通して大ヒットを続け、同時に様々なキャラクター商品などの販売も進んだ。

99年には、大型セルアニメ映画『宝蓮灯』が制作され、作品には手塚治虫や松本零二の作品の影響がみられている。また90年代後半以後、宮崎駿の『風之谷』（風の谷のナウシカ）、『魔法公主』（もののけ姫）、『千と千尋』（千と千尋の神隠し）などのアニメ映画作品が中国にも紹介され、さらに青少年向けに『GTO』や『箏球飛人』（スラムダンク）などのコミック本が流通するようになった。こうして中国の青少年は従来から中国アニメーション映画のキャラクターに描かれていたヒーロー像には満足できなくなってきたといわれる。

中国アニメも60年代以降の作品であれば、VC D・DVD・ビデオ等で入手できるようになったので、この機会に観賞をすすめたい。



中国アニメ・コミック展のにぎわい（上海市）

## 中国留学体験談

法学部2部 原田大輔君へのインタビュー

法学部

鄭 高咏

わたしは2002年4月から1年間原田大輔君に中国語を教えました。当時、原田君が在籍していたクラスは全員がまじめで、真剣に中国語の学習に取り組んでいて、今でも鮮明な印象が残っています。1年生の中国語を担当していた故浅井加葉子先生との出会いや先生の熱心なご指導のお陰だと思います。2001年11月に原田君は中国語コンテストに出場し、みごとに優勝しました。正直に言いますと、共通科目としての中国語を担当しているわたしは、法律を専門としている原田君の中国語に対する情熱にどのように対応し、どこまで指導すればよいか、私なりに躊躇したところがありました。では原田君自身、中国への留学に迷いがなかったのでしょうか、実際中国に行ってどうだったのでしょうか。これらの点について原田君に尋ねてみましたので、お聞きください。

**鄭**：まず、中国留学のきっかけを教えてください。

**原田**：きっかけは一年生の秋学期に、外国語コンテストに出場した時です。コンテストの表彰式で矢田先生と初めてお会いしました。その時に交換留学の制度があることを教えていただきました。それ以来、留学に興味を持つようになりました。特に当時大学の講義で、中国語を教えてくださいました浅井先生に強く勧められました。ですから私にとって中国に留学するという選択肢は、入学当初からは到底考えられない事でした。

**鄭**：中国への留学を決めた際、迷いはなかったですか。

**原田**：交換留学の試験を受けるかどうか迷ってる時に、姉に「チャンスがあるなら、挑戦しないのは損だ」と言われて、迷いが吹っ切れました。特にこれという目標は無かったです。どうせ勉強するなら、とことん勉強したいと。そもそも私が中国語を選択した理由も、特にこれといっていないです。

私は中学、高校時代は英語が本当に嫌いでした。私の高校は科目選択が自由なのも手伝って、英語は全然勉強をしてなかったんですよ。卒業に必要な最低限の科目しか履修せず、後は倫理や政治経済、日本史等の社会科の科目ばかり選択してたんです。なぜかというと、外国語を「やらされている」という感覚があって、それが好きになれませんでした。大学の入学時に語学の選択をする必要がありますよね。その時に中国語を選択しました。

「なぜ中国語を選択したの」と、今でもよく聞かれます。私の専攻は法律ですし、法学というとドイツ語と思われるでしょう。私自身も最初はドイツ語にするつもりでした。でもアルファベットを見るのが嫌で。そうなると韓国語か、中国語しかないですよ。じゃあ、その中で中国語を選んだのはなぜかという.....本当に、ただなんとなくなんです。強いて挙げるなら、小さいころ母方の祖母に進められた本の影響.....本当にそれぐらいです。ただ自分自身で選択した語学だけは、たとえ何語であれ一生懸命勉強しようと思いました。やはり初めて自分の意志で選択した外国語ですから、途中で投げ出すような事だけは絶対にしませんでした。

**鄭**：今まで中国に一度も行ってないですが、実際行ってどうでしたか。具体的な感想を聞かせてください。

**原田**：そう、初めてなんですよ中国。実は私は今まで日本から出た事もなく、中国が初めての外国。そういった意味では行く前からすごく楽しみでした。今でも忘れられないのは、中国に到着した初

日です。大学の受入期間の関係で、天津までの直通便が使えなかったんですよ。韓国経由で行くか、北京に降りて天津まで行くか。中国に行く訳だし、どうせなら北京経由で行こうかと思いました。着いてみると大変で、バスを乗り継いで移動。今から考えたら、とても信じられません。後から聞いた話によると、大学に迎えを手配する事もできたらしいのですが、この初日の経験は、後に中国で生活していく時に大きな自信になりましたね。

中国での生活で慣れるのに苦労したのは、講義が始まる時間がとても早いということですね。朝8時から講義なんですよ。私は夜に大学へ通っていたので、これには慣れるまで苦労しました。それでも慣れてくると楽しいものでした。大体の講義は午前中だけでしたので、午後は勉強したり、お茶を飲んだり、友人と街に出掛けたりと、楽しく過ごす事が出来ました。

**鄭**：現地での講義について紹介してもらえますか。

**原田**：講義も楽しかったです。最初は初級2班でした。初級班は楽しかったですね。皆が分からない事だらけだったので、お互いに助け合うという雰囲気がありました。

最後の半年は高級班で講義を受けていました。初級班とは違い、緊張した空気の中で毎日講義が行われました。特に印象にあるのは、作文の時間です。最初の講義で先生が「君たちの話している中国語は、文章にすると半分しか意味が通じない」と言われた時です。ショックでした。確かに語学は話せるようになれば終わりじゃないと思います。「書く、聞く、話す」が三位一体となって、ようやく形になるのだとその時実感しました。それから、できるだけ毎日中国語で日記をつけるように心がけました。講義も中頃にさしかかった5月に、先生から「文を書くのが上手くなった」と言われたのが嬉しかったです。

当初高級1班の中で私の出来は悪い方でしたので、最初のうちはひたすら挑戦の毎日。それでも充実感は何倍も感じました。例えば自国の建築の特徴、例えば自国の民間故事や昔話の発表は楽し

かったです。口語や作文の時間は一番楽しかったですね。自分を表現すること、自分の国を表現することには特に力を注ぎました。

一番厳しかったのが文法の時間です。南開大学の高級班には、素晴らしい文法の先生がいました。大変情熱のある先生で、当初全く駄目だった私の文法も、その先生のお陰で、大分良くなりました。

**鄭**：今振り返って最も良かった点はなんですか。

**原田**：とにもかくにも中国茶と出会えた事です。最初に言った通り、中国へは語学を勉強しに行くという漠然な気持ち。つまりなんとなく流れに乗って行ったんです。ふとある時に、語学だけを勉強するのに苦痛を感じるようになりました。当然語学の勉強を目的にするのは素晴らしい事ですが、私の場合は、はっきりとした方向性が定まっていませんでした。最初の1ヶ月は常に自己嫌悪との闘い。やがて、自分には何も無いと気づかされたんです。その時、相手の国の言語を学ぶためには文化を知らなくては駄目だと思いに至りました。では、何をしたらよいのか。私は中国茶が好きなので、お茶の歴史や、点て方を勉強しようかと思いました。古文化街で安い茶器を値切って買い、お茶葉を買い、自分の部屋で練習しました。本で見たり、お店で見聞きした見様見真似でしたが。

その後韓国人の友人にお茶を出したところ、大変好評で、宿舍内に噂が広がりました。やがて多くの人にお茶を出しているうちに、一つの事に気が付きました。お茶を通して自分の中国語が上達していたのです。最初は「お茶を点てる側が話ができないとまずいな」と思い、勉強量を増やしたのがきっかけでした。

ある日、タイ人の友人が急に日本語で「お茶さん」と話しかけてきたんです。日本語を勉強し始めた学生さんで、お茶が好きだから「お茶さん」だそうです。とても嬉しかったのを覚えています。今年7月に帰国するまでの一年と少しの間、宿舍では中国茶といえば私のこと、つまり「お茶さん」と皆に言ってもらうまでになりました。「お茶さん」と呼んでもらうこと自体は、そんなに重要じゃ

なかったんです。大切だったのは、一番良かったのは、一杯の中国茶を通じて多くの国の人と出会えた事、一晚中話をしたことは、今でも忘れることのできない財産です。

去年の国慶節に本格的な茶器を買いました。それから徐々に茶器を買い足していき、帰国前には、とても多くの茶器と茶葉がそろいました。その茶器や茶葉に全ての思い出が詰まっています。

一杯のお茶は、ささくれ立った私の心を癒してくれましたし、多くの人とも知り合えました。まだまだ未熟ですが、これらの経験や出会いを通じて、留学当初より中国語も上達しました。

とにかく中国茶ですね。お茶抜きでは今回の留学は有り得ませんでした。

**鄭**：カルチャーショックは？

**原田**：留学当初から何も感じませんでした。初日に何とか大学について、食堂で食べた晩ご飯の味は今でも忘れられません。大げさな話ですが、一口ご飯を食べた時に、あの激動の到着時のことが頭をよぎり、その時初めて「この国で生きていける」と、思いました。食に関しては何も問題なかったです。なにしろ初めての中国、初めての外国ですから、周りが知らない事だらけ。慣れる事に必死で、カルチャーショックを感じている暇はありませんでしたよ。

**鄭**：今後どのように中国での経験を活かしますか。又、中国語と法律を結びつけていく予定は？

**原田**：今は、法律と中国語を結びつけるというビジョンは、明確に浮かんでません。最近は司法通訳というのがありますよね。まあ、それも一つの選択肢だと思います。でも、私には夢があるんです。機会があれば今一度中国に留学し、本格的に中国茶の勉強がしたいです。そして、小さくてもよいから、中国茶のお店を開きたいですね。留学にあたって、家族、愛大の先生方、国際交流課のお世話をしてくれた方々、留学先の先生方、友人と、助けてもらってばかり、与えてもらってばかりでした。今度は、勉強させていただいた中国語、

現地での経験を活かし、お茶という形で少しでもいいから皆様にお返しをしたいと思います。

**鄭**：最後に一言お願いします。

**原田**：まず、私の留学を支えていただいた、家族、先生方、大学職員の皆様、友人に深く御礼申し上げます。

愛大は中国で、特に天津では有名で、高い評価を受けています。これも、我々の先生、先輩方の努力により培われた伝統だと思います。留学している時は、我々の一挙手一投足が大学の評価につながります。現地では、愛大生という誇りと責任を感じて勉強をしてほしいと思います。本日は有り難うございました。

・・・現在、原田君とわたしとの会話は全部中国語で行っています。わずか1年間だけの留学でしたが、その中国語の流暢さに感心する限りです。

## 世界で一番好きな歌手

経営学部  
山本 大造

みなさんにとって、「世界で一番好きな歌手」は誰でしょうか。しかも、その人の楽曲や声を聞くだけで、ふるえ立つような感動を覚えたり、しみじみ感慨にふけったり、心に残る風景を思い起こしたり、鳥肌の立つような勇気に満ちた気分になったり、人との出会いや思い出を振り返り、素直な自分を取り戻したりできるような。そんな歌

手に出会うことができれば、それ自体が幸せなことだと思います。私の場合、韓国の女性歌手、李仙姫（イ・ソンヒ）がそんな「世界で一番好きな歌手」なのです。

李仙姫は、ご存じの方もいらっしゃるでしょうが、背が低くて身体も小さく、メガネをかけていて、どちらかといえば地味な印象で見られがちです。しかし、その小さな身体のどこから出ののかというくらい圧倒的な声量と幅広い音域までカバーする歌唱法は、見た目とはまったく違う印象を与えます。1982年にデビューして以来、ポップス調のものからバラード調のもの、民族音楽風のものから、男性声楽家とのセッションや激しい曲調のものまで多種多様な楽曲を歌い継ぎ、韓国を代表する女性歌手の一人として老若男女問わず多くの人たちに支持されています。その間、心臓病の持病を抱え、いくつものつらい思いをし、ソウル市議会議員として多忙な日々を送った彼女ですが、今日でも声量衰えることなく、現役で活動中です。

そもそも私が李仙姫を知ったのは、私の初めての韓国旅行（91年8月）で彼女のカセットテープを何気なく買って帰ったことがきっかけでした。当時の私は、一人で海外をぶらつくことにあこがれ、「手近だから」という理由だけで韓国を選び、これまた身近にいた韓国人留学生の友人から韓国語の手ほどきを受けていました。実に何気ないきっかけから、韓国を知ろうと思ったのです。しかしこれも縁というものでしょうか、私はどんどん韓国の魅力に引き寄せられ、ついに韓国一人旅を決行したのでした。

ソウルから昭陽湖（ソヤンホ）を通る「裏ルート」で束草（ソクチョ）に行き農家の一室に泊ってもらって初秋間近い雪嶽山（ソラクサン）に登ったり、紅島（ホンド）に渡ろうとして木浦（モッポ）を訪ねたり、光州（クワンジュ）や釜山（プサン）なども巡る気ままな旅でした。その旅の途中、ソウルのCDショップで、店員から勧められるまま女性歌手のカセットテープをいくつか買った中に李仙姫のライブ版テープが含まれていた

わけです。

もともと韓国語の語感には私にとって心地よいものでしたから、当初は「耳障りが良いな」くらいに思っていました。しかし、日本のテレビ番組で李仙姫を見て「これはすばらしい」と確信に変わりました。確か1991年末だったと思いますが、NHK番組「ゆく年くる年」に李仙姫がソウルからのライブ放送で出演し、彼女の代表曲「Jに（ジェイエゲ）」と「美しい山河（アルンダウンガンサン）」を披露してくれました。私は感動のあまりテレビの前で呆然と立ちつくし、年が変わるのも忘れて聞き惚れてしまいました。

その時以来、私にとっての「世界の歌手」は李仙姫になりました。自ら韓国に行ったり、誰かが韓国に戻るたびに音源を集め、ますますのめり込んでいきました。そればかりではありません。彼女は私に大切な人の縁も運んでくれました。

それは92年春、私が横浜で大学院生活を送りはじめたころのことです。昼休みに院生室で李仙姫のテープを聴きながら一人昼食をとっていた時、彼女の声を通りがけに耳にした一人の韓国人留学生が「韓国人かい？（ハングンサランジェヨ?）」と声をかけてきました。実は彼も李仙姫のファンで、その後意気投合し、彼を中心に私は韓国人留学生達と親交を広めていきました。当時、私は日々の食費にも困る生活をしていたため、時折彼らは自宅に招いてくれ、韓国料理を振る舞ってくれました。韓国人留学生達の温かい人柄に励まされ、栄養をつけてもらって、きびしい時期でしたがなんとか今日の私につながる事ができたわけです。声をかけてくれた韓国人留学生、張武鉉（チャン・ムヒョン）氏は、今ではソウルで事業を興しCEOとして活躍していますが、今でも時にふれて親交を温め、私にとってかけがえのない「ソウルの親友」になっています。李仙姫を聞くたびに、当時のことや仲間達が思い起こされ、懐かしく熱い気持ちがよみがえってきます。

そしてこの夏（2004年8月）、ついに彼女のコンサートを生で見える機会を得ることができました。ちょうどソウルを訪れる日、李仙姫の20周年コ

ンサートが世宗文化会館で行われることを知った親友の張 武鉉氏が、私のためにチケットを手配してくれて、私は初めて彼女をこの目で見、彼女の声をこの耳で聞いたのです。

それはそれは、すばらしい体験でした。コンサートホールに入る前から、私は長年離ればなれになっていた恋人に再会するようなときめきと興奮を覚え、気分は高まる一方でした。ロビーでコンサートの運営を手伝っていた「ソニーファン（李 仙姫ファンの意）」の女性から、李 仙姫の直筆サイン入りCDを譲ってもらい、新しいBEST版CDを買い求め、ますます気分は高揚していきます。そしてステージに登場した李 仙姫を見た時には、思わず隣にいた張 武鉉氏の肩をたたいて喜びを露わにしました。そのコンサートの約2時間は、もう決して忘れることができません。今思い返しても、その感動がありありとよみがえってきます。

確かにコンサートで披露された楽曲は、すべて繰り返し聞き込んだ私の耳になじんだ曲ばかりでした。しかし、生で見、生で聞く彼女の歌声は、私の五感のすべてに入り込み純粋な感動を与えてくれました。プログラムも後半になると、周りの観客達と一緒に立ち上がり、ともに楽曲を口ずさみ、それはまるで熱いライブの様でした。彼女の代表曲でもあり、コンサートの最後の曲「美しい山河」では、民族や国、性別や年齢の差を超えて会場がまさに一つになる大合唱の渦でした。彼女のデビュー曲でありアンコール曲でもある「Jに」では、彼女自身マイクを会場に向けてくれ、私たち観客もそれに応え、想いの結晶を作り上げた気持ちになりました。まさに、私の好きな韓国の人々と私が一つになった得難い一時でした。ちなみにコンサートのあと、ホップ（ピアホール）で飲んだビールの味が格別だったことは言うまでもありません。次の機会には、大学路（テハンノ）にある李 仙姫のライブハウス「LIVE小劇場」を訪ねてみたいと思っています。

私の場合、心を揺さぶられるまでの感動を与えてくれる歌手は、韓国の女性歌手だったのですが、なにもみなさんにも海外にそれを求めよと言

うつもりはありません。国内にもきっとみなさんの「世界一」があるでしょう。ただ、広く世界を見聞きすることで、得られる高みは必ずあると思います。機会があれば、みなさんの「世界一」をうかがってみたいところです。

## 悲しみは夏雲の下に サイパン島訪問記

法学部  
河原誠三郎

爆撃機はいつも南からやってきた。翼は朝日で銀色に輝き、ぼくらに向かってきた。その度ごとに、ぼくらは家を捨て、裏山へ逃げた。

ぼくはいまその南に、南の島、サイパンにきている。あのB29爆撃機が、日本本土空襲へ発進を繰り返したその場所だ。

名古屋空港で飛行機に乗り込んだ時、その離陸待機中のエンジン音にぼくは恐怖を覚えた。そうだ、この音だった。一万メートルの高空から落ちてくる、切れ目のない、周波数の異常に高い音だった。ぼくはすぐにも乗務員に機種を確かめたかった。人生の初めに聞いたあの大型長距離爆撃機を製造した同じ会社の757機だった。

いつかはここへ来たいと思っていた。憧れの島ではない、遊びのための島でもない。ぼくらの若い父達が、空しく戦い、玉砕という勇ましい用語で美化されてはいるが、その実、見捨てられて死んでいった小さな島だ。ぼくは、短い旅の一昨日、ここに着いた。

ぼくらのホテルは島の西、珊瑚礁に沿った海岸



にある。見下ろせば、台風16号で頭をもぎ取られた椰子の下の青いプールでは、朝日を浴びて早くも幼児が父親とはしゃいでいる。ラグーンのあちこちでバナナボートが軽快に走りまわり、ダイビング練習中の日本の若者達のタンクが浮き沈みしている。引率された小学生の列は、水に入ったばかりだ。

あの子供達は、この海岸が「ランディングビーチ」と呼ばれていることは知らないだろう。ヨーロッパでノルマンディー上陸作戦が始まってすぐ後の6月15日の朝9時前、日本軍の防衛戦を珊瑚礁越しの艦砲射撃で攻撃した後、アメリカ海兵2個師団、歩兵1個師団の第一派8,000人が上陸を開始した海岸だ。その日、反撃の夜襲があった。激戦だったといわれている。ラグーンの中には上陸用舟艇から落ちた戦車の黒い影が見える。海岸には赤さびた日本軍の戦車もある。

ぼくは、ホテルの部屋を出て、まぶしい光のなか、海岸を北へ歩いていく。名も知らぬ熱帯の林に沿って白い渚が遠く遠く続いている。艦載機の爆音、横たわる多数の死者や負傷者、乗り上げた舟艇、陸揚げされた兵器や補給物資、射撃音、叫喚、砲声。北フランス海岸の実写フィルムや映画『プライベート・ライアン』などで見たことのある、あの修羅場の切羽詰まった場面がこの一帯で繰り広げられていたことなど、想像もできないほど、いまは整地され、物一つなく、ただ波だけが、静かに穏やかに平和を楽しんでいるかに見える。

ぼくは、一昨日、午前中をこの海岸で過ごした。水は温かく澄み切っていて、シュノーケルをしながら、一週間前にうけた鼻中隔手術の成功を幾度も確かめ、健康であることの喜びを初めて知る思いだった。潜水を繰り返しながら、この健康が続くことを願った。

午後早く、戦場巡りのツアーに参加した。日本人ばかり10人ほどだった。中に、年寄り夫婦が一組と、北支から復員したぼくの叔父ほどの年齢と覚しき人がいた。ぼくはすぐに、背筋の通ったその老人と声を掛け合うようになった。「娘が一人では危ないからと付き添って来ている」と、その

人はよろめきながら初めに言った。島の南部中央の、黒木隊が全滅した場所に建つ鎮魂碑の前で、ガイドの説明を聞きながら、ぼくは、彼が大正12年生まれで、満ソ国境に派遣された工兵隊の学徒兵だったことを知った。「工学部を出ました」と言って、墓碑代わりの無反動砲の砲身を何度も撫でた。「ガダルカナルでもアッツ島でもトラック島でもレイテでも、多くの人が死にました」と、一息に言って、溜息をついた。その悲しげな表情から、彼はもう、硫黄島をはじめラバウルもブーゲンビル島も、遠いタラワ島でも、もしかしてインパールでも同世代の若者達の鎮魂を済ませているかもしれないと思った。

艦砲射撃でなぎ倒されてもしたかのように、猛烈な風で太い枝が折れて垂れ下がる森を抜け、島の南へ向かった。いま国際空港になっている辺りの西側一帯が、当時日本海軍の飛行場だ。1944年の7月9日、米軍はサイパン占領の宣言をした。占領後まもなく重爆撃機隊が移駐してきた。ぼくらの行く道路に沿って、あの爆撃機の駐機場が夏草に埋もれながら並んでいる。重い車輪が沈まないようにと固めたコンクリートが60年を経た今も、真新しい。焼夷爆弾を腹一杯に詰め込み、夜明け前つぎつぎに離陸して、小笠原諸島沿いに日本攻撃へ向かったはずだ。一部は沖縄を北上し、長崎、佐世保を空襲して、ぼくらの上空を通り、博多、小倉、八幡を爆撃したに違いない。ぼくは、荒れ果て、階段だけが残る日本海軍司令部の正門前に立ち、西の丘を見やった。丘を回って機影を次々消していく編隊の残像を、そして6時間半後空襲警報のサイレンの鳴る中逃げまどう女や子供達の姿を見たように思った。大阪からの疎開が遅れていたなら、ぼくも同じ運命だったかもしれない。

ツアーの終わりは、島の南西端、アギンガン岬だった。日本軍も米軍もここの荒い海に突き出た突堤から、物資の陸揚げをしたという。サイパン水道を隔てて、西10キロには、我々日本人には忘れられないテニアン島が見える。真っ平らの黒い島だ。8月3日守備隊1万5千人の玉砕後、北の端の飛行場から、「エノラ・ゲイ」が広島へ、「ボツ

クスカー」が長崎へ原爆を抱えて飛び立った。兄嫁の姉は長崎で被爆した。通り過ぎたばかりの16号の影響で、島はここサイパン以上に荒れている、ツアーは中止、連絡の船も出ない、飛行機も飛ばない、と言われ、渡ることを諦めた島だ。しかし、ぼくは内心諦めきれずにいた。打ちつける波しぶき越しに、忘れまいと目を凝らしていた。シャッターも押し続けた。



きのうは朝から雨模様だった。18号が生まれそうだと、テレビニュースは言っていた。午前、ぼくは島の北の端まで行こうと思った。3ドルで一日乗り放題という切符を買い、まずパウパウビーチの「ホテル・ニッコー」へ向かい、そこからバスの終点「マリアナ・リゾート&スパ」まで行った。そこで大急ぎで昼食をすますと、待っていたタクシーに飛びのった。

平坦な一本道だった。ウェストコート・ハイウェイといまは呼ばれている。3方向から追われた日本軍は、民間人と共にこの路を北上したはずだ。島の端まで行けば助けが待っていたかのように。進退窮まった人々は、一部はマッピ山へ向かい、女達は子供を抱いたまま、切り立った断崖から150m下に次々身を投げた。ぼくはインド人の若い運転手に時々停車してもらい、その高い崖を見上げた。最後の司令部があったという場所も見た。大砲が空しく空へ向いている。第43師団司令官斉藤中将が割腹自決し、真珠湾攻撃時の機動部隊司令長官であり、今は中部太平洋方面艦隊司令長官としてサイパン島を守備していた南雲中将がピストル自決した洞窟も近い。中將は自決前、海軍葬



送歌『命をすてて』を歌い、「守備隊に与うる訓示」で、「止まるも死、進むも死、皇国の弥栄を祈念すべく敵を求めて発進す。続け」と読み叫んだ、と歴史にある。

ぼくは、よくDVD『映像の世紀』を見たくなる。20世紀初めのベル・エポックと呼ばれた幸せの時代からは暗転し続け、アウシュビッツの虐殺や原爆の悲劇を経てベトナム戦争まで、前世紀と言うにはあまりにも身近な時代に起った、とりわけ悲しい出来事を実写フィルムで見せてくれる。ぼくが悲惨さに耐えきれず泣き出しそうになり、家族の手前、いつも慟哭を抑えに抑える場面がある。「菊水作戦」に従って、滑走路の端で最後の盃をあげ、黙々とゼロ戦へ向かう特攻隊員の若い姿を目にする時だ。フィリピンで「武蔵」も「山城」も「扶桑」も撃沈され、最後の空母4隻は沈没した。勝敗はすでに決まっていた。勝ち目の少しもない作戦をつぎつぎ遂行させた参謀本部、海軍軍令部の非情さに腹が立つ。勇者ぶることもなく黙然として散ろうとする若い命がいとおしい。冷静に命を捨てうるのだから、生き残っていたら、という思いが胸を打つ。このときぼくはいつも、特攻隊員として出撃し沖縄で死んだ母の従弟の話を出すのだ。「痩せた、きれいな子だったよ」と母はよく言っていた。有為の青年でもあったろうという思いがぼくの胸を締め付ける。この文章を書きながら、いまも目は涙でいっぱいになる。

若者の命は尊い。若者をこんな仕方育ててはならないのだ。ヒトラーの緒戦の電撃作戦で捕虜となった何十万というソビエトの兵隊達、スター

リングラードの敗北で捕らえられたヒトラー軍は將校も兵も、氣落ちもせず羞じらいも見せず、堂々と歩いて後送されていたではないか。パターンの米軍捕虜達もまたそうだ。「生キテ捕虜トナル者ハ一人モアルベカラズ」、「生きて虜囚の辱めを受けず」などは一兵卒への戒めではない。政策の失敗を戦争という非常手段で乗り越えようと計画した者、開戦の号令を發した者、そうした上層部自身こそ受けるべき言葉だ。

中将二人は、指導部の者として、この島で守備作戦を司令した者として責任はとるべきであったろう。自決はよし。しかし、部下の兵や民間人には、生き残り、再起はかれ、と勧めるべきではなかったか。参謀本部は自ら救援の路を絶ったのであれば、グアムでもビアクでも玉砕などさせず、捕虜となることを命令すべきではなかったか。

日が陰った。北の方角にスコールの氣配が感じられた。ぼくはあわてて車にとび込むと、「バンザイクリフ」へ向かうように言った。



異様な光景だった。様々な形で、鎮魂碑が建っている。戦後、痛ましさに耐えきれず、ひとびとは集まって碑を建てた。これさえなければ、明るい光、広い草原、どこまでもつづくプルシアンブルーの海、心地よい風、花々の美しい南の島へ来た喜びが感じられるだろう。

追い詰められ、人々はこの崖の上に殺到した。家族は集まり輪を作り、最後の手榴弾を炸裂させた。深い深い断崖だ。大波が寄せ、高いしぶきを上げている。いやがる子供を抱えて飛び込む者、女達はアメリカ兵をおそれてつぎつぎ飛び降りた。ぼくはその場面を実写フィルムで見て知っている。

この恐ろしい光景が繰り返されたとき、すでに海上には米軍が進出し、投降を呼びかけ、身投げを諦めるようアナウンスを繰り返していたという。それでも人々の投身は止まなかった。マツビ山の「シューサイドクリフ」の自殺者と合わせて4,000人近くがこの島の北端で死んだと言われている。

ぼくはまもなくここを去る。ぼくを乗せ、B 757機は、テニアン島の右を上昇し、1944年11月24日東京爆撃に発進したB 29超重爆撃機94機、また、翌年3月9日夕方離陸した334機と同じコースを硫黄島までとり、そこから、次の11日名古屋爆撃へ向かった同じコースをとって西に折れるはずだ。

ぼくの頭は悲しみでいっぱいだ。火炎樹の咲く美しいこの南の島だけで、3万の若い日本兵と1万の島民が死に、米軍1万5千人弱が死傷した。死ななくてもいい死を多くの人が死んだ、という思いがつかまとう。玉砕も特攻も、広島も長崎も、避けられた悲劇だった。戦死の公報が届き、久人さんの遺骨が帰ってきた日、ぼくは祖父母に連れられ、迎えに行った。特攻隊員の遺骨が還ることなどないことを知りつつ、遺骨を開き、親戚みなどで泣いた。

一昨日ツアーで出会ったあの老学徒兵も、あの断崖に立っただろう。本でしか歴史を知らないぼくより、彼の悲しみは大きかったはずだ。

まもなく、学校が始まる。若者の命は尊い。若者の命はねらわれやすい。ぼくが担当する250人に向かって、憲法がなにより大切なのだとおもう。タイではほぼ100%の、中国では83%の人が自分の国籍を誇りにしているそうだが、アジア10カ国で一番ピリでもよいではないか、資源確保目的だけの侵略戦争で迷惑をかけたことを恥じつつけているのなら。大国意識を持たないようにしよう、ロシアに勝った思い上がりで国を誤らせたことを忘れまい、とおもう。そして、政治家には警戒を怠るまい、とおもう。昔も今も、彼らには自分の命を投げ出す気など、初めからないのだから、とも。

## メキシコ・チワワ鉄道に乗って

経営学部  
丸谷雄一郎

私はメキシコシティで生まれ、研究対象にしているのでメキシコへは毎年のように訪れている。しかし、北部を本格的に回ったのは初めてだった。メキシコの国土は日本同様縦長である。メキシコシティ以南がアステカ、マヤといった文明が残した遺跡の宝庫であるのに対して、北部は国境沿いの大都市を除いては目立った見所は少なく、最近発展したハリウッド御用達のロスカボスや太平洋岸のリゾートとグアナファトなどの高原都市という例外はあるものの、訪れる人は少ない。今回のメキシコ視察はメキシコをより深く理解することを目的に敢えて日本人があまり訪れない北部地域を対象とした。

北部を理解するのに欠かせないのがチワワ鉄道である。チワワ鉄道はメキシコに唯一残る長距離旅客鉄道であり、内陸のチワワ州の都市チワワと太平洋岸の港町ロスチモス間の653キロを結んでいる。その行程は急行で13時間50分、普通で15時間25分ということになっている。

今回私は内陸のチワワから乗車し、途中クリールで一泊して、ロスチモスへ向かった。チワワ鉄道は一日に急行・普通とも上下1便のみであり、私が乗ることにした急行の出発時刻は早朝6時であるため、前日夕方に空路でチワワに入った。チワワはチワワ犬の由来となっていることで有名であるが、そのイメージとは対照的に、メキシコ革命の発火点となった男っぽい都市である。メキシコ革命の際、パンチョ・ビジャ率いる北部旅団は

現在の鉄道の前進であるオリエント鉄道の機関車を接收し、それで馬ごと移動し、ゲリラ戦を行い、革命軍の勝利に貢献した。その名残は街のいたるところにみられ、ブーツや馬具といった革製品の店が立ち並んでいた。

乗車当日は5時半にホテルから街はずれの駅までタクシーで向かい、列車はほぼ定刻通りにゆっくりと出発した。車内は日本の新幹線ほどではないが、特急電車並みに快適であり、クッションもしっかりしていた。20分程で車窓は田舎に一変し、放牧地やブドウ畑が続いた。今回のチケットは朝食つきだったので、8時頃食堂車で中にかつおぶしのようなものが入った不思議な味のチワワ風オムレツとトーストの朝食を食べた。いくつかの小さな町に停車しながら、列車は山岳地帯に突入した。車窓には林ととうもろこし畑が延々と続き、定刻通りの11時半に宿泊予定のクリールに到着した。

クリールは駅を中心に一本道があるだけの小さな町であるが、先住民タラウマラ族の居住地域が近く、山岳観光の拠点となっている。ぼろぼろのバスに3分ほど乗りホテルに到着した。宿は米国資本のベストウエスタンで、各部屋がロッジとなっていた。街の散策には30分もかからないので、半日コースの観光に出かけた。4WDで10分ほど行くとゲートがあり、そこからはでこぼこ道が続く。しばらく行くと視界が開け、とうもろこし畑と先住民タラウマラ族の住む洞窟が現れた。そこを見学した後、「マッシュルームバレー」と呼ばれるきのこの形の奇岩の密集地帯を散策し、この地域最初の伝道所を見学した。伝道所は非常に素朴な建物であり、メキシコ各地にある荘厳な教会とは対照をなしていた。そのうち、北海道の湖に似ているアラレコ湖を通過して夕方ホテルに戻った。

翌日は11時半に昨日降りた列車に乗車した。列車はさらに登り、13時15分海拔2250メートルのディビサデロ駅に到着し約15分間停車した。この駅にはこの列車の主要な見所である銅溪谷の展望台が設置されており、一時下車することができる。溪谷はグランドキャニオンの4倍の規模というだけ

あり、眺望はすさまじく、壮大としかいいようがない(この眺望に関しては『エスクエア日本版』97年7月号を参照、すばらしい写真が掲載されている)。列車はその後さらに数箇所の駅に停車しながら急降下していく。車窓は前半とは変わって湿原地帯となり、「ロード・オブ・ザ・リング」を思い起こさせる雄大なものであった。銅溪谷の眺望は確かにすばらしかった。私が最も感動したのは湿原地帯の風景であった。その豊かさはメキシコ南部のマヤ遺跡チチェンイツァのピラミッドの上からの光景と並ぶほどで、見ていて自然に涙が出た。私はここを見ただけでもこの鉄道の旅の価値があったと思った。

しかし、その感動の後は大変だった。列車は貨物列車とのすれ違いの都合で大幅に遅れ、19時50分予定が23時にロスチモスに到着した。ホテルでシャワーを浴び、ベットに入った後もずっと体が揺れている感じだった。

チワワ鉄道の1泊2日は大変な行程であったが、天候に恵まれたこともあり自然に圧倒されっぱなしであった。メキシコの空はどこまでも青く、その車窓はありえない光景の連続であった。今回は日程の都合上1泊2日の強行軍であったが、次回はまだ2日ぐらいかけてゆっくりと沿線を訪ねてみたいものである。



チワワ鉄道からみえる雄大な風景

## スプナーとスプナーリズム

経営学部

安藤 聡

スプナーリズムとは「語頭音位転換」である。例えば 'car park' と言おうとして 'par cark' と言ってしまったり、'King Richard' を 'Ring Kichard' と言い違えるようなものだ。スプナーリズムという名称はオクスフォード大学ニュー・コレッジの学寮長を勤めた神学者ウィリアム・アーチボルド・スプナー (1844~1930) に由来する。ロンドンに生まれたスプナーはオクスフォードで古代史、アリストテレス哲学、神学を学び、生涯の大半をニュー・コレッジの研究員兼牧師として過ごした。彼はこの種の言い間違いを頻繁に繰り返していたので、それが有名になり話が脚色されていくつもの伝説になっているのである。実際に 'spoonerism' という言葉はオクスフォードでは口語として1885年頃から使われていたという。

スプナーリズムの面白さは、語頭の子音や音節が入れ替わることによって、偶然別な意味になってしまうことがあるという点にある。今日まで語り継がれているスプナーの失言に関する伝説の大半はオクスフォードの学生たちが創作したものとされているが、それらは例えば彼が「我が親愛なる女王」(our dear queen) と言おうとして「我が奇人なる学寮長」(our queer dean) と言い違えたとか、「半ば形になった望み」(half-formed wish) を「半ば温められた魚」(half-warmed fish) と、あるいは「よく油を差した自転車」(well-oiled bicycle) を「よく煮込んだ氷柱」(well-boiled icicle) と言い違えた、など

といった話である。コレッジの中庭で火遊びをしていた学生を叱咤するのにスプーナーは、「君たちは中庭で嘘つきと戦っていた」(You were fighting a liar in the quadrangle) と言ったとも伝えられている。これはもちろん、「火をつけていた」(lighting a fire) を言い違えたものである。

このような伝説の中で最もよく出来ているのは次に挙げる例であろう。ろくに授業にも出席せず成績不振に陥った学生に退学を勧告するに際してスプーナー先生は「君は私の神秘学の授業に対して黙れと野次を飛ばし、芋虫を一匹丸ごと味わった。君は次の町の下水に流されてオクスフォードを去ることになる」(You have hissed my mystery lectures; you have tasted a whole worm. You will leave Oxford on the next town drain) と述べたという。この科白は本来なら次のようになっていたはずのものである。「君は私の歴史学の授業を欠席し、学期を丸ごと無駄に過ごした。君は次の下り列車でオクスフォードを去ることになる」(You have missed my history lectures; you have wasted a whole term. You will leave Oxford on the next down train)。

『オクスフォード引用句辞典』の第二版(1953)では、よく引用されるスプーナーの名台詞として 'kinquering congs their titles take' と 'tasted two worms... town drain' を挙げていたが、第三版(1979)では 'weight of rages' (「賃金の権利」を「怒りの重さ」と言い違えた例)のみを挙げ、その他の有名なスプーナリズムの実例については、「この辞典の以前の版に挙げたものを含め、その多くは正典と認められない」と記している。日常的に彼が繰り返していた言い間違いの多くは、'Ring Kichard' の例のように特に意味をなさないものが多かったであろう。もちろん有名な例のいくつかは実際にスプーナーによって語られた「正典」であったのかも知れないが、文字として書かれたテキストでない以上今となっては明らかなのは誰にも判らない。

またこのような語頭音位転換に限らず、例えば J・M・シングの戯曲『西国の伊達男』(*The Playboy of the Western World*) を彼は『西国の農夫』(*The Ploughman of the Western World*) と称したり、スコットランドの地名ジョン・オグロウツ (John o'Groat's) をジョン・オヴ・ゴント (John of Gaunt: エドワード三世の子) と間違える、といった単純なものも多かった。この程度のことは誰でもやりそうだが、スプーナーは特にこれが激しかったと伝えられている。

スプーナーがこのような伝説を生み出すほどに頻繁に言い違えていた理由は、頭の回転が速すぎて発話がそれについて行けなかったため、と推測されている(確かに、私の恩師にも何人か、そういう傾向が認められる人がいる)。スプーナーの外見は極端に背が低く目つきが鋭く(極度の近視だったため)、体格の割に頭が異常に大きく、メラニン色素の欠如のゆえか妙に色白で、浮世離れたグロテスクな様相だったという。内面は神経質で小心者だが人柄はよく、牧師としてはそれなりに人望もあつたらしい。浮世離れた奇人、というのはオクスフォードの学者の多くに共有される特質ではあるが(というよりも世界中の大学教師の多くに、と言うべきかも知れないが、特にオクスフォード大学では伝統的にその奇人度が尋常でない)、その中であつてもなおスプーナーは伝説として語り継がれるほどの愛すべき奇人であつた。

この奇人の特徴のひとつとして「上の空であること」(absent-mindedness) が挙げられる。おそらくは哲学や神学といった高邁で深遠な事柄について絶えず考えていたためであろうが、スプーナーの思考はつねに日常的な次元を遙かに遊離していた。以下のエピソードはある英語の教科書に載っていたものである。第一次世界大戦が終わった頃のある日、戦地から帰ってきたひとりの学生を廊下で呼び止めて、スプーナー先生曰く、「あー、その、何だ、あれは君だったかな、それとも君のお兄さんだったかな、戦争で亡くなったのは」(Now let me see, was it you or your brother

who was killed in the war?). また急進派ジャーナリストでレフト・ブック・クラブという出版社を設立したことで知られるヴィクター・ゴランツがスプナーにニュー・コレッジでの晚餐に招かれたときのこと、ゴランツがスプナーの客間で待っていると、スプナーは鏡に向かって一所懸命にネクタイを結んでいた。隣の部屋に続く扉が少し開いていて、そこから誰かが文章を朗読する声が聞こえていたと、ゴランツは述懐している。ネクタイ結びがうまく行くとスプナーは満足して、ゴランツを促して部屋を出ようとしたところで矢庭に踵を返し、「忘れていた」などと呟いて半開きだった扉に首を突っ込み、中でまだひとり朗読を続けていた従順な学生に向かって、「だめだ、まったくなっとらん。来週までに聖パウロのエペソ人への使徒書簡についてのレポートを書いてくるように」と言い残し、再びホールに向かったという。つまり、ゴランツが到着したときにスプナー先生は、オクスフォード名物「テュートリアル」(tutorial: 個人指導。週に一度、学生がレポートを書いて来てそれを読み上げ、担当教員がコメントを与えるという形式で進められる)の授業中だったのである。しかし、ネクタイを格好良く結ぶこととゴランツをもてなすことに気を取られていたためか、彼は授業中であることを完全に忘却し、部屋を出る刹那にそれをやっと思出したということなのである。スプナー先生はほとんど聞いてもないそのレポートに不合格を宣告し、次の週までに同じようなレポートを書き直して来い、と命じたのであった。他にもこの教科書には、スプナーが遠い町へ出かけるときに、オクスフォード駅まで見送りに来ていた自分の妻にチップを渡し、ポーターに別れのキスをして列車に乗り込んだ、というエピソードが紹介されている。

スプナーのような奇人を愛して伝説化すること自体が非常に英国的であり、彼は英国でなければ、さらに言えばその英国の中でも奇人の楽園として名高いオクスフォードでなければ、これほどまでに伝説化されていなかったであろう。という

よりも、そもそも英国でなければ、またオクスフォードでなければ、このような人物は育たなかった、と言った方がいいかも知れない。一方で英語は他のヨーロッパ語と比べて遙かに語彙が豊富であることから、語頭音位転換によって偶然別な意味になる可能性もそれだけ高い。スプナーの言い間違いは英語だったからこそこれだけ創造的になり得たのである。英語の言葉遊びに関する本を多く著している米国の著述家リチャード・リーダラーは「スプナーは私たちに、心温まる間違いと英語の恐ろしさの両方を同時に見せてくれた」(Spooner gave us tingly errors and English terrors at the same time.) と述べている。

## THREE DAYS IN MADRID

法学部

John Hamilton

I had not been to Madrid before. The summer didn't seem to be a good time to go. The Encyclopedia described it as 'oppressively hot in July and August....Everybody goes away and all the shops are shut'.... but I went because my son Robin was there, and he had been lent a flat by friends who had gone to France.....I wanted to have a glimpse of his life there. It was an opportunity. As it turned out they were among the best days of my summer holiday.

Robin is studying Spanish at Newcastle University and he was coming to the end of his third year out which he had spent in Spain. The

last three months he had been working for Christies, on the telephone in Spanish most of the time, helping to set up their auction in November. He didn't receive any salary for this, but he had had to walk out to work in a suit every morning, and at the end of it he had been given a good letter of reference (He wrote it himself needless to say, but it was signed and sealed by all the members of the office!). The week before I arrived, the Christies people had gone on holiday and their office had closed till September.

The flat was in Calle San Gregorio up from Plaza de Chueca right in the centre of Madrid. It was a very nice flat with kilims on the floor (beautiful wooden floors), and a good collection of books, and lots of plants (Robin's job was to keep them alive through July and August). There was a fine view out through the balcony over the roofs of a convent with a lovely tower to a strange green roof in the distance (near to the Cristobal Colon Memorial Fountain.). There was also Robin's girlfriend who could make delicious Gazpacho (with especially delicious croutons), and Robin who was able to make excellent spaghetti. I can't remember who made the Tortilla. In the kitchen there was a modern fridge with a button on the front which released a deluge of ice. I could quite happily have spent my whole stay in Madrid in this flat, reading the books, playing Backgammon, listening to Bob Dylan, having a siesta in the afternoon, and going out for walks at night. Our kind neighbours in England had introduced the family who lived there, and they had become Robin's guardian angels in Madrid, finding him a job before the Christies one came up, and finally lending him their flat. It is not a bad idea to take up introductions!

Outside down the street was the Plaza de Chueca (named after Frederico Chueca, a Zarzuela composer) which has some drinking establishments and these days is the centre of the Gay community in Madrid, maybe of Spain. During the daytime it is very quiet, but at night

till two in the morning it is a lively place. Beyond the Plaza was the Mercado St Anton, a covered market where there were a number of shops including one selling hams and cheeses. When I left, I took 'Chorizo' (sausages) and some 'Queso Manchego' (a spicy cheese) back with me to England.

The centre of Madrid is full of big trees and it is actually quite pleasant to walk around there in the middle of the day. Madrid had a good Mayor in the 1980s - Enrique Tierno - who was famous for planting trees. Not only that, but there were many gardeners there watering the trees and cutting the grass and keeping it all looking fresh. Under the trees there are beautiful fountains and stone benches to sit on in the shade. The Prado Museum is in the middle of all this greenness and I wanted to see the paintings by Goya there. There are the famous ones like 'La Familia de Carlos IV' (a portrait of the King and his family) and 'Tres Mayo' (showing the execution by French soldiers of a citizen of Madrid in 1808). The first gives a feeling of the Ancien Regime in all its decadence, and the next of the new tyranny being unleashed by the French Revolution (which has been blighting the world ever since!)



Actually I liked best Goya's designs for tapestries especially 'El Quintasol' (The Parasol) and 'La Gallina Ciega' (Blind Man's Buff) to be found on the top floor of the Prado. Walking around Madrid afterwards I noticed many people with big black eyes like those in Goya's portraits. Also in the Prado Museum I



was very excited by Velasquez's painting 'Las Meninas' (translated as 'Maids of Honour'). This is a self portrait of Velasquez himself, standing beside the Infanta Margarita, as he paints the King and the Queen who you can see reflected in the mirror at the back. It is a lovely picture.

Opposite the back door to the Prado is Madrid's Botanical Garden which is an oasis to go and relax in after visiting the Prado. There are many trees and plants there which were brought in from South America..... but not only from South America. There is also a beautiful Aleppo Pine from Syria, and a willow tree from China, actually called *Salix Babylonia*, and a magnificent elm tree called 'El Pantalones' because the two trunks look like a pair of trousers. Everything is laid out in beds surrounded by box hedges, and there are fountains and statues and stone benches to sit on in the shade, all there right in the middle of Madrid.

Outside the garden we enjoyed a jug of SANGRIA. This was my first encounter with Sangria which is a kind of fruit salad cocktail. You start drinking and about ten minutes later you feel you have always lived in Madrid. After we returned to the flat, I looked it up in a book of recipes. It consists of:

- a bottle of red wine,
- two tablespoons of orange juice,
- one tablespoon of sugar,
- two tablespoons of orange liqueur,
- a cup of sparkling water or club soda,
- orange and lemon slices,
- apple and peach wedges,
- maybe a splash of Martini
- and lots of ice.

Actually everybody makes it differently, but the basic ingredients are ice and wine and fruit.

In the same recipe book I checked out PAELLA which I often make on a bonfire outdoors in Japan. The key to a good Paella is the 'socarrat' (in Japanese 'okoge') which comes

from 'socarrar' to scorch or singe. This is the rice which has been burned on the bottom of the pan. The recipe in the book said that the rice must be short grain Valencia rice. It also recommended mixing the saffron with the broth, not throwing it directly into the rice, so I am going to try that next time.

While we were drinking Sangria we got the exciting news from England - it must have been a text message on Robin's telephone - that my eldest son Mark had passed his driving test on the thirteenth attempt. Mark is very clever. He got a first in Arabic at Durham, but somehow the English driving test had eluded him. The news went down very well with the Sangria.

While in Madrid I managed to get to the Musee Thyssen-Bornemisza and to the Reina Sofia Modern Art Museum. The Thyssen-Bornemisza collection was offered to London, but apparently Mrs Thatcher turned it down. Actually I wasn't surprised. There are one or two lovely pictures there, in particular a small one painted by Sonia Delaunay, and a beautiful picture of 'An Orchid with Humming Bird' by an American artist called Martin Johnson Heade, and a Frans Hals family group..... but on the whole they were lesser works by great artists and a little disappointing. A lasting memory of the Thyssen- Bornemisza for me was of a very tall girl looking at the pictures. She was about 9 feet tall and real. The pictures were all hung too low for her.

I went twice to the Reina Sofia because the first time I missed 'Guernica.' There was a fine collection of modern art including a 'Golden Table of the Moon' by Tadaaki Kuwayama and an alabaster sofa by Eduardo Chillida. There were also some good mobiles combining lights and mirrors.... I went back to see GUERNICA by Picasso the next day.

Guernica was a small town in the Basque country in the north of Spain. In April 1937 the Germans bombed the town using Stuka dive bombers. It was one episode of the Spanish Civil War. Picasso in Paris learned about it

from photographs in L'Humanite. He was commissioned by the Spanish Republican Government in Madrid to paint a picture for the Spanish Pavilion at the Paris International Exhibition, and 'Guernica' is that picture. It is a very large picture painted in blacks and whites and greys. Picasso said that if you scratched the canvass, blood would seep out. The painting shows the bombing of Guernica, although in it there are no aeroplanes or bombs. The victims are women and children and there is a traumatised horse. It is not a nice painting but it is in every way a denunciation of war, and was painted just before the Second World War began in which bombing played a large part. Soon afterwards there was the Blitz in London and the bombing of German and Japanese cities, and finally the atom bombs dropped on Hiroshima and Nagasaki..... And since then America has continued to bomb in Vietnam and most recently in Baghdad. So it is indeed an important painting.



In the Reina Sofia there are sketches that Picasso painted before he painted 'Guernica', and after he painted it. The faces of the women are said to be those of Marie Therese Walter and Dora Maar, Picasso's girlfriends at that time. It is said that the black and white and grey give one a hint of newsprint. It is also said that the bull in this picture represents Fascism, outwardly so powerful and dangerous, but in the end to be the loser.

Again, the bull and the horse are said to be inspired by cave paintings. Another interpretation is that the woman holding out the lamp is Picasso's deformation of the Statue of Liberty. I am not quite sure what Picasso

intended, but then nor is anybody else! The painting went first to America, and was only returned to Spain after Franco died in 1981 and Spain had become a democracy. There is a tapestry copy of 'Guernica' at the United Nations in New York donated by Nelson Rockefeller. It hanging in the corridor outside the Security Council's meeting room. Picasso refused to sell him the original.

Next time I visit Madrid I want to be there during a weekend so that I can go to Las Ventas and see the bull fighting.

Thankyou to Camilla and Andrew Montgomery, whose flat in Calle San Gregorio I stayed in. Thankyou to Dr Kinichi Tanaka of Toyohashi who lent me some beautiful Spanish guitar music played by Julian Bream which I have been enjoying while I write this. Thankyou to Robin and Laura for showing me around their Madrid. It was so nice being with them.

# (海外最新事情)

## イギリス

### (1) 柝の実遊び禁止令

柝の実遊び (conkers) とは柝の実 (conker) に糸を通してそれを二人が互いにぶつけ合い、割れた方が負けという実に単純明快な遊びである。英国の子供たちの間で広く行なわれ、また英国の大人たちも負けじと毎年秋になると世界大会を開催したりしている。斯様にポピュラーな柝の実遊びであるが、最近になって複数の小学校がこれを禁じた。

2004年10月7日付の大衆紙『ザ・サン』によると、それは木の実アレルギー (というものがあるらしい) の子供を守るためだという。重度のアレルギーを持つ子供だと、木の実に触れるだけで症状が出るのだそうだ。湖水地方の西の外れエグレモントのブックウェル小学校では重度のアレルギーの児童が数名いるため、柝の実を校内に持ち込むことをも禁じている。スコットランドはスターリング近郊のメンストリー小学校では栄養学者の助言に従ってこれを禁止したが、校長は「子供の生命に関することでは、どんなに注意しても注意しすぎることはない」と述べている。それに対して保護者からは、「アレルギーの危険性は十分承知しているが、禁止は狂気の沙汰としか思えない」という意見がある。『サン』の記者も明らかにこれらの動きを行き過ぎと考えている。

他にも「子供を柝の実から守るための愚行」が数件報告されている。カーライルのカマーズデイル・スクールでは柝の実が眼に当たって怪我をすることを未然に防ぐために、柝の実遊びの祭にはゴーグルの着用を義務づけている。同じくカーライルのヘイトン・スクールではゴーグルに加えて、

指の怪我を防ぐための手袋の着用が校則で定められている。さらにニューカースルに近い東海岸のサウス・シールズでは、子供が登らないように街路樹の柝の枝をすべて市議会が切り落とさせたという。これに対してこの地区選出の下院議員マーティン・カラナンは「馬鹿らしくて言葉もない。これは何かのジョークか?」とコメントしている。

### (2) 結婚祝いの「ジェンダーフリー」化

近年英国では「ハグ・パーティ」(hag party) というものが頻繁に行なわれている。とは言うても老醜女 (hag) が集まるパーティではない。先ずは「ヘン・パーティ」と「スタッグ・パーティ」の話から始めよう。

ヘン・パーティ (hen party) とは結婚式の前に新婦の同性の友人が新婦を祝福するために開催するもので、女だけのパーティなので「雌鳥 (hen) パーティ」と言うのである。一方のスタッグ・パーティとは当然、新郎の同性の友人が新郎を祝福する男だけのパーティである。スタッグ (stag) は「牡鹿」であるが、何故「牡鹿」と「雌鹿」(doe)、あるいは「雌鳥」と「雄鳥」(cock) という対称にならないのか、という疑問はとりあえず忘れよう。ジェニー・コルガンの小説『アマンダの結婚』には、主人公メラニーと悪友フランがアマンダの結婚相手フレイザーのスタッグ・パーティに乗り込んで行く場面があるが、これは特殊な事例であり普通は男女が混在することはない。いずれの場合もたいていは飲食店やホテルの一室を借り切って行なわれる。

そしてハグ・パーティというのは、ヘン・パーティとスタッグ・パーティを合わせたものである。2004年9月19日の『インディペンデント』による

と、最近一年半の間にハグ・パーティが急速に普及しているという。そういえば『サン』のサイトではここ数週間、ハグ・パーティの体験談を読者から募集していた。『インディペンデント』の記事では、晩婚化によって新郎新婦の友人同士のカップルが増えたことと、新郎新婦それぞれに異性の友人が増えたことをその背景と考えている。

もう一つの背景はスタッグ・パーティやヘン・パーティを禁止するホテルや飲食店が多くなったことである。男女別パーティでは酔っ払って羽目を外すことも多く、破壊行為や暴力行為に発展することも少なくない。エディンバラでは数年前にスタッグ・パーティに来た男が通りすがりの17歳の少女を強姦するという事件が起きている。10月4日付の『インディペンデント』によればイングランドの海辺の観光地にもこれらのパーティを封じる動きがあるという。特にスタッグ・パーティによる治安悪化が問題になっているからである。男女混合のハグ・パーティなら互いに異性の眼を意識するから、それほどひどい騒ぎにはならないということだろうか。(安藤 聡)

## アメリカ

### 俗化する？アメリカ英語

どうもこのところ、アメリカ英語はますます俗っぽくなっています。そしてそこには、往々にして黒人英語の特徴が垣間見られます。たとえば最近では、ブッシュ大統領が(ラッパー同士の決闘をあおる司会者よろしく)テロリストに対して“Bring it on!”(「かかってこい!」)と挑発すれば、大統領候補者のケリー上院議員も国家安全保障のディベートの場で同じ言葉を投げ返したりします。Boost Mobile社の携帯電話のコマーシャルでは、ラップにあわせて“Where you at?”(“Where are you?”のこと)が駆け巡り(<http://www.boostmobileanthem.com/>),各メディアのキャッチ・コピーはさながら黒人英語のオンパレードです。

一方で、黒人作家 James Baldwin のように、日常黒人英語(Black Vernacular)は、かつては自己防衛の手段だったと考える人もいます。黒人が迫害された時代、白人からの想定しうる危害に対して、素早く、悟られないようにその危険を伝えるという必然性から生まれたというのです。事実、表面的な人種融合の陰で、1960年代以降、黒人はますます孤立度を深め、「モノリナル化」が進行していると指摘する黒人英語の研究者もいます。これはおもに、貧しい黒人はますます貧民街に追いやられ、自らと同じ境遇の人々とししか交流がないことと関係しています。また黒人の中にも階層化が進み、裕福な黒人と貧しい黒人とに分裂しつつあります。本来の黒人英語は疎外され、メディアに乗りやすい、若者の「クールな」黒人英語が市民権を得るという図式には、安易な解釈を超えるものがあります。

しかし、すべてを「黒人英語化」で片付けるには大きな無理があります。黒人英語は独自の口承伝統に根ざした英語の一大変種ですが、標準英語もこの1世紀の間はかなり「話しことば化」してきました。例えば、3度も大統領候補になったことのある William Bryson は、1896年に当時の金市場を批判して、“You shall not press down upon the brow of labour this crown of thorns, you shall not crucify mankind upon a cross of gold!”(「労働者の額にこの棘の冠を配するなかれ。金の十字架に人間を処すなかれ。)」という名演説を行いました。現在の演説では、このような技巧と華飾に彩られた表現はほとんど見られません。ある人たちは、1960年代の対抗文化(counter culture)がこのようなフォーマルな英語の衰退を招いたと考えています。この真偽はともかく、世界的により話しことば化が進行しているのは事実です。

特に20世紀後半から現在にかけて、「心理的な近接化」を図ることばの使い方(語用論では「ポジティブ・ポライトネス」といいます)が世界的に主流になりつつあります。つまり、人間相互の垣根を取り払って、同じレベルで語ろうとする傾

向です。話しことばの多用もこの流れのひとつといえるでしょう。また、言語学者のなかには、言語に共通する特徴に原因を求める人もいます。例えば、アメリカ英語（特に話しことば）では、もう“whom”が使われることはほとんどなくなってきました。専門的に言うと、これは「水平化」とか「ドリフト」と呼ばれる現象で、言語内部の体系的不均衡を正そうとする自然な流れなのです（“whom”を“who”に簡略化することで、他の関係代名詞と同様、格変化にとらわれずに体系的に運用できる）。しかし、他の見方から言えば「ことばの乱れ」ということになります。（『「ら」抜きことば』もこの一例です。）しかし、話しことばに収斂しているという点で、これも一種の「モノリಂಗ化」なのかもしれません。このような言語的多様性の消滅と、インターネットやメールなどにおけることばの多様性が、今後私たちの社会にどのような影響を与えるのか、大変興味深い問題です。 (片岡邦好)

## ドイツ

### ドイツとギリシア ヨーロッパの北と南で

アテネ・オリンピックの間、いったいどれほど私たちはあの白く輝く神殿を見せられたことだろう。世界遺産にも登録されている美しい神殿はまた同時に失われた文明が私たちに遺してくれた、まさに「遺産」としての廃墟なのである。最盛期の古代ギリシア、とくにアテネの絶頂期からはや2,500年もの歳月がたっている。その間を繋ぐものは何なのか、また現代のギリシアについてはどれほど知っているのだろうか。

ギリシアはその実像はともかく、長い間ヨーロッパの人々にとって憧憬の地であった。そして寒く、貧しい北の国の住民であったドイツ人はとりわけ遙かかなたの南の国、歴史と文明の源であるとされたこの地に深い憧れを抱き続けた。

しかしギリシアは長く西欧からは失われた土地だった。すでに紀元前2世紀にローマに編入され、

4世紀末にはローマ帝国の分裂を受け東ローマ帝国の領土となった。東ローマ帝国が1453年に滅ぼされると、1821年にいたるまでオスマン・トルコの支配を受けることになる。ギリシアは、ローマと違い長い間異なる文化、異なる宗教のもとにある遠い国だったのである。

18世紀の中葉になってやっと、新古典主義の流れを受けたグreek・リバイバルと呼ばれる芸術運動が起こり、ギリシアの再発見が行なわれるようになった。このとき一人のドイツ人が大きな役割を果たした。彼の名はヨーハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンといい、貧しい靴職人の子として生まれたが苦学の末、古典文学・美術への造詣を深め、『ギリシア美術模倣論』によってギリシアの芸術の価値を広く西欧の人々に知らしめた。ヨーロッパにギリシアブームが沸き起こり、ギリシア風の建築がいたるところで見られるようになった。

だがギリシアは依然として失われた土地であった。ヴィンケルマンはギリシア美術を賛美しつつ、生涯ギリシアの地を踏むことがなかった。ゲーテはイタリアの風土と芸術に触れることによってみずからの再生を果たしたが、ギリシアに足を運ぶことはなかった。相変わらず遠い国、遙かかなたに存在する歴史の上の存在だったのである。それゆえにこそ人びとの憧れを掻き立てることもあったのだろう。ドイツではロマン主義の人たちやヘルダーリンがギリシアへの憧れを熱心に歌いあげた。

実際にギリシアがヨーロッパに復帰するのは、苦しい解放戦争を戦い抜いた1830年のことであった。この年ロンドン議定書により独立が国際的に認められ、1832年近代ギリシア王国が成立する。初代国王オソン一世は、芸術王で知られるバイエルン国王ルートヴィヒ一世の次男である。ギリシアに関する関心は大いに高まった。この頃ドイツを初めヨーロッパでは美術館設立ブームの真っ最中であり、彫刻を中心としたギリシアの美術は古典としてますますその価値を高めていった。

その一方でギリシアの現実は何となく革命が起こり、新たにデンマークの王子が

国王になるなど、国政はなかなか安定することがなかった。その後王制が廃止され共和制になり、国際連盟やアメリカの援助がかりうじて政府を支えた。

ドイツとギリシアの間での最大の不幸が、1941年から1944年までのドイツ軍による占領である。憧れの主体と対象が最も悲惨な形で一致することになった。ともに戦争で深く傷ついたが、戦後の政治はギリシアにとってより苛酷であった。連合軍による解放後、左右の対立が激化し、内乱状態が長く続いた。1967年には軍事独裁政権が成立し、多くの人々が圧政と貧困に苦しんだ。民主制が復活したのは1975年のことだった。

現在多くのドイツ人が旅行者として、気軽にギリシアを訪れる一方で、数多くのギリシア人がやむをえない事情で稼ぎ労働者としてドイツで暮らしている。かつての憧れの国について旅行者たちは何を思い、また送金を受けて暮らしている家族は旅行者たちをいったいどんな気持ちで眺めているのだろうか。(島田 了)

## フランス

### 家族関係の法律 2 件施行

2005年1月1日に、家族関係にかかわる法律が二つ施行される。

その一つは、子どもの姓に関する法律で、両親は子どもの姓に、「子どものそれぞれを同じ姓とする限りにおいて、父親の姓、母親の姓、または両親の二つの姓を両親が選んだ順序で併置した姓」のいずれかを与えることができるようになるというものである。ただし、父親と母親の間で合意が成立しない場合は、父親の姓を与えることになる。この法律は2005年1月1日以降に生まれる子どもから適用されるが、2006年6月30日までは、すでに生まれている長子の姓に、用いられていない父母の一方の姓を付け加えることを申請できるようになっている。この場合、その姓がその父母から生まれたすべての子どもの姓となる。ただし、

2003年9月1日の日付で13歳以上の年齢に達している子どもについては、書面による同意が必要である。ちなみに、フランスでは12世紀以来、夫婦間に生まれた子どもは父親の姓を与えられてきた。800年以上にわたって続いてきた伝統がこの法律によって終焉することになる。

もう一つは、上記の法律とは直接関係ないが、離婚訴訟の簡素化と離婚調停に関する法律である。まず、離婚の約60%を占める協議離婚の場合、家庭裁判所への出頭が現行の2回から1回に軽減される。また、これまでは6年間の別居が確認されなければ認められなかった「共同生活の断絶」による離婚は、今後、「夫婦関係の決定的悪化」による離婚に取って代われ、2年間の事実上の別居があれば認められることになる。一方、有責離婚については夫婦間暴力や不倫といった「重大な状況」に限られる。これは、この部類に入る訴訟の80%は財産分配に関するいさかいによるものであるにもかかわらず、「双方向的過誤」による離婚が言い渡されてきたために制限を加えたものだというのである。

なお、フランスでの婚姻率および離婚率の推移は次のようになっている。婚姻は、1980年の33万4400件、1000人当たり6.2件から、2000年の29万7900件、1000人当たり5.1件に減少しているのに対し、離婚は、1980年の8万1200件、夫婦1000組当たり6.32件から、2000年の11万4000組、夫婦1000組当たり9.37件に増加し、2000年にはほぼ3組が結婚する一方で1組が離婚していることになる。(田川光照)

## 中国

### 北京の「景山現象」 中国新気功？

中国の首都北京市には毎日、国内外から大勢の観光客が訪れます。紀元前11世紀の燕の国にまでさかのぼる悠久の歴史と文化にささえられた大都市には、例えば今年の10月1日から7日まで国慶節の連休期間中に400万人もの人々がやって来まし

た。北京は政治だけでなく、国際的な観光都市でもあります。

北京の観光スポットといえば、万里の長城や明の十三陵、それに故宮博物館などが有名ですが、北京っ子である私のお勧めは「景山公園」です。故宮博物館の北側にあり、公園の中心には小高い丘があります。丘の上から眺める故宮の鳥観図はまさに絶景。夕暮れになると、目の前に広がる故宮の屋根瓦が金色に染まります。

景山公園は交通の便が良いうえ、北京市内で最も松の木が多くて空気が新鮮だと言われています。このため、観光客だけでなく、大勢の北京市民が集まります。

最近、ここで起きている「景山現象」といわれる活動が北京の人びとに注目されています。一体、どんな活動なのでしょう。現場を訪ねてみました。

8月のある日曜日。午前9時頃でした。公園にはすでにたくさんの人たちが集まっています。“早啊，来了。”（おはよう、よく来たね）、“挺好的？”（お元気そうですね）。にこやかにあいさつを交わします。

みんな手に小さな冊子を持っています。そこには曲と歌詞が書かれており、あいさつを終えると、それぞれが歌い方を確認したりしています。そうです。公園に合唱をしに来ているのですね。

人びとは大きな輪を作ります。輪は二重、三重、四重に増え、数え切れないくらいの人々の壁ができます。並び終わると、いよいよ合唱開始。指揮者とアコーディオンの伴奏のもと、空まで届くような澄んだ声が公園中に響きます。ざっと見渡すと、その時点で200人以上もいました。1曲終わるごとに人の数は増えていき、自然といくつかのグループに分かれます。

合唱は11時半まで続きました。最後に、全員そろって“今日相聚在景山，嘹亮的歌声冲破天；要是觉得不过瘾，再等下一个星期天。”（今日，景山に集まって交歓し，高く澄んだ声は天にまで達した。もし満足できなかったら，また次の日曜日に会いましょう）と歓声をあげ，握手しながら分か

れを告げました。

参加者の多くは退職した50代から80代の人たちです。サラリーマンや公務員だった人もいれば、軍の高級幹部など地位の高かった人もいます。でも、歌う時は肩書を忘れて、互いに「歌友」と呼び合います。歌っている曲は1940～60年代の懐かしくて明るい歌が多く、みんな自分の若い頃のことを思い出しながら、幸せそうに歌っていました。

66歳の張さんは「カラオケの店に行くと部屋は狭いし空気が悪く、お金もかかる。ここなら何百人、何千人と一緒にマイナスイオンの多い松の木の下で歌えるので、精神的にも健康的にも最高だ」と話していました。隣にいた60歳の李さんは「その通り。みんなで一緒に元気に年を取るんだよ。ここに来れば、みな友人だ」と笑い、76歳の陳さんは「わたしは20年間、喘息で何回も発病したが、5年前から毎週土日にここで歌うようになり、症状はだいぶ軽くなった。新しい気功みたいなもんだね」とうれしそうです。

現在、中国では景山公園のような中高年の合唱団が各地で続々と誕生しています。公園は高齢者の社交の場というわけです。もっとも、高齢化社会が始まりつつある中国では、老後を豊かに過ごすために、公園以外の交流の場も作らなければならないでしょう。急速に変わっていく中国には、取り組むべき課題が山ほどあります。

（鄭 高咏）

## 韓国

### KTX，国内航空旅客を奪う

今年（2004年）4月1日に韓国的高速鉄道KTX（Korea Train Expressの略）が開通した。路線は京釜線と湖南線の二つで、前者はソウルと釜山を2時間40分で、後者はソウルと木浦を2時間58分で結んでいる。従来の特急セマウル号の場合、ソウル・釜山間が4時間10分、ソウル・木浦間が4時間42分であるから、大幅な時間短縮が実現したわけである。当然のことながら、国内航空

便の利用客数に影響が出ることは当初から予想されていたことであるが、10月17日に韓国の聯合ニュースが報道した記事によってその大きさが明らかになった。

その記事は、韓国空港公社が国会建設交通委員会の委員に提出した国政監査資料の内容を紹介したものである。それによると、KTX 開通後の4月から7月までの4ヶ月間で、ソウルの金浦空港発釜山、大邱、光州行き航空旅客数は昨年同期に比べて24%減の282万3838人で、運行便数も20%減の2万1503便であった。済州路線のようなKTXの影響を受けない路線では旅客数の増加が見られるので、国内線全体では旅客数が1270万7364人で、昨年同期に比べて11%の減少であるとのことである。ちなみに、地方空港の国際線の場合、1998年以降昨年までの5年間で、輸送実績が年平均12.3%増加するなど持続的な成長を見せ、今年は今末までに37路線で260万人の乗客が利用すると推定されている。また韓国空港公社は、金海（釜山）と済州、光州を除いた金浦など11空港が赤字になると予想しているとのことである。

ところで、KTXのホームページ (<http://ktx.korail.go.kr/>) によると、1996年から次世代高速電車G7が開発されている。これは現在のKTXよりも50km速い時速350kmの最高速度をもつもので、試験運行と安定化の期間を経て2007年から京釜線と湖南線に投入する予定であるとのことである。このG7は「韓国型」と形容されており、フランスの高速電車TGV (Train de Grande Vitesseの略)を導入したKTXとは異なり、韓国が独自に開発したものと思われる。ともかく、このG7が投入されれば、韓国の国内航空便はますます打撃を受けることになるであろう。

(田川光照)

#### 編集後記

「語研ニュース」第12号をお届けします。今回は、取り上げられている国・地域が中国、韓国、サイパン、メキシコ、スペイン、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスと徐々に広範囲なものになりました。その内容も旅行記から時事的なものまで多彩で、楽しく読めるものになったと思います。

ところで、名古屋語学教育研究室が行っている学生向け事業として、この「語研ニュース」発行のほかに、外国語検定奨励金制度の実施や外国語コンテストの開催などがあります。これらについて詳しくは当研究室のホームページをご覧ください。(M.T.)